



木製品を身近に。その可能性を追求する。

阿部伸さん



屋号は「Iria」。「入谷の阿部」からもじったものだ。
10月6日(日)に開催される「ひころマルシェ」にも出店予定だ。

SHIN ABE

木 製のスプーンやヘラなど、手作りのカトラリーを手がけるのは阿部伸さん。入谷出身の阿部さんは自衛隊員として職務を全うしていたとき、旅行先で目にした木製のターナーを見て「自分にもできるのではないか」と思い、仕事の合間を縫って制作を始めたという。「でも難しくてさ、試行錯誤の連続。1年くらいヘラだけ作っていたけどもともと作れなかった。スプーンも作ってみるかと思い、始めたけどもともと商品になるのに3年はかかったね」

制作を始めてから5年ほどたったとき、自分の作品を販売する機会が訪れた阿部さん。「思いのほか、たくさん作品を手にしてくれて、購入して喜んでくれる姿があって、それがうれしくて」と目を細める。

自衛官を退官後、3年ほど前から地元入谷でも拠点を持った活動。この地では、「木組み工法」と呼ばれる伝統工法に出会い、木の可能性をさらに感じているという。「IoTを活用した最新技術と、鎌倉時代から続く伝統工法の力。アイデア次第でいろんなことができる可能性がある。考えることから始まって、動いて、削って、組み立ててできるって過程すべてが面白い」

そう生き生きと語る阿部さんの手からどんなものが生み出されるのか。今後に期待したい。

新しいことに挑戦するって楽しいじゃないですか！

高橋栄策さん

出 身は神戸市。20代に大阪北浜でデザイン事務所を起業、従業員6人で大手企業と直接取引し独創的なデザインや企画で業績を上げていた。平成7年阪神淡路大震災が発生し、地震で倒壊した高速道路の近くに住んでいた母親と連絡が取れなくなった時の不安や、被災者への思いが栄策さんの人生を変えた。

阪神淡路大震災から2年後、大阪で開催されたボランティア講座に参加し、自分自身ができることは何か？を常に意識しながら本格的に活動しようと決断した。

国の緊急雇用を活用し、地域起こし事業に参画したり、京都府亀岡市での農福連携事業を進めた。そんな栄策さんが、南三陸に移り住むきっかけになったのは東日本大震災だ。すでに息子が被災地支援活動を行っており、彼の応援で来町したのだと教えてくれた。支援に来たつもりなのに、逆に心配してもらったり優しく接してくれたりと、人柄の良さが素晴らしいと南三陸町の印象を話し、今ではたくさん友人ができた嬉しそうだ。

「この町には資源がたくさんある。地元の子どもたちや高齢者はもちろん、町外からいらした人をも楽しませる『南三陸自然学校』のような事業を始めたい。新しいことに挑戦するってワクワクして楽しいじゃないですか」栄策さんは笑顔で語る。

EISAKU TAKAHASHI



平成28年8月歌津上沢地区に奈良から移住。南三陸産の食材を生かしたカレーやガバオライスを福興市やイベントで販売するなど、南三陸の良さを町内外にPRする活動にも意欲的だ。